

読売新聞 1995.3.29

## 越後の山野をさまよひ歩く瞽女をひとすじに命がけで描いて、

昨年9月に死去した齋藤真一の遺作展。

1964年（昭和39）冬、北陸を旅して、初めて瞽女を知り、彼女たちの姿や生活様式の古風さに打たれた齋藤は、その後、越後の瞽女宿三百軒を巡り歩き、亡き多くの瞽女の発掘にかけ、二百人の瞽女の存在を知る。それは貧しさと孤独を三味線にたくした凄絶な苦行であり、寂しく貧しいがゆえに群れ、群れば裏切りが生まれ、リンチをほどこす者と受ける者が出る、地獄であり、飢餓道ある。その過去世の記憶を三味線にたくして歌いつづける。

それを齋藤は血をイメージさせるような重く、濃い赤を主調に描き続ける。「越後瞽女日記」（1972年）の盲目の旅芸人たちは何ともやり切れない悲しみと孤独に彩られている。

「みさお瞽女」のひとり孤独の淵に沈む老いた瞽女、「陽の別れ」の真っ赤な雪原に沈む並木道を三味線を抱えて独り歩み続ける瞽女、「妙音講」の瞽女一座の興行…。

それらはいずれも顔をデフォルメし、情熱の炎がいきなり凍りついたような赤で彩られ、孤独という業火に灼かれるような赤で描かれている。また透明度のある赤のようで、生き物のようなねっとりとした赤で縁取られていたり、塗り込められていたりする。

また「明治吉原細見記」「吉原炎上」を描いたり、スペインのジプシーを追って作品にもしている。放浪する魂を描き続けた齋藤の心の中にまで焼きついてくる色の魂は、見る者の目を奪わずにはいない。1922年岡山県生まれ。油彩、水彩、デッサン、掛け軸、版画三十点。